

論 説

## キリスト者知識人にとっての国際連盟： 新渡戸稲造のデモクラシー論を手がかりに

湯 浅 拓 也\*

雲より上なる空に出でぬれば 雨の降る夜も月をこそ見れ<sup>1)</sup>

### はじめに

冒頭で引用した言葉は、新渡戸稲造(1862-1933)が国際連盟事務次長を辞して帰国したときに、在任時代の「観察の結果」をまとめたものの一編に収録されている言葉である。この言葉は、東洋・西洋の風俗習慣や思想に違いはあるものの、「高き人道の立場」あるいは「深き学理」によって、狭小なる国家主義を脱することで、「東西の諒解」に達することは可能であるという新渡戸の確信を表現した言葉である<sup>2)</sup>。このように新渡戸が「東西の諒解」に対する確固たる確信を有していたことは、国際人としての新渡戸らしい言葉と行うことができるだろう。

新渡戸が国際人といわれる所以は、国際連盟の事務次長を務めた以外にも、日米交換教授として日米交流の一翼を担い、また太平洋問題調査会(The Institute of Pacific Relations, IPR)などを舞台に、近代日本の対外関係にさまざまな

\* 青山学院大学大学院 国際政治経済学研究科 国際政治学専攻 博士後期課程。国際政治経済学会 2018年6月26日受付, 8月24日レフェリーの審査を経て掲載決定。

1) 新渡戸稲造『東西相触れて』[初出: 1928年10月]『新渡戸稲造論集』(岩波書店, 2014年), 287頁。以下、『新渡戸稲造評論集』については、出典表示の煩雑さを避けるため、書名と初出年のみを表示する。

2) 新渡戸前掲書『東西相触れて』, 286-287頁。

形で関わっていた人物であることが大きい。そのため、近代日本の対外関係を考える上では欠くことのできない人物として、国際連盟や太平洋問題調査会などの国際場裏での新渡戸が果たした役割について、さまざまな角度から研究がなされてきた<sup>3)</sup>。

しかしながら、これまで新渡戸の国際秩序観やそれを支えた思想的背景については十分に検討されていない。確かに新渡戸が東京帝国大学などで教鞭をとった植民政策論やそれに伴う文明観については研究がなされてきたが<sup>4)</sup>、彼が携わった国際連盟に対する評価については本格的な研究はなされていない。その要因は、冒頭で引用した言葉にも表れているように、新渡戸の言葉があまりにも理想主義的であるため、国際連盟における権力関係を主要な研究対象としてきた外交史や国際政治学の研究の対象とはなりにくかったことが大きく影響しているのではないか。

そこで、本論文では、新渡戸のデモクラシー論を切り口に、彼の国際連盟に対する評価を明らかにすることを目的とする。以下で詳述するように、新渡戸のデモクラシー論は、他の大正デモクラシー期の知識人たちとは異なり、新渡戸の社会認識とキリスト教信仰が結びつけられた議論であり、同時に、第一次世界大戦後の国際社会をデモクラシーの時代として捉えていた新渡戸にとって、

3) 国際連盟との関係では、廣部泉「国際連盟知的協力国際委員会の創設と新渡戸稲造」『北大文学研究科紀要』第121号、2007年2月、1-20頁、廣部泉「国際連盟知的協力国際委員会の委員選考過程と新渡戸稲造」『明治大学教養論集』第441号、2009年1月、39-53頁、齋川貴嗣「国際文化交流のナショナリズム：戦前期日本における「学芸協力」事業を中心に」『次世代アジア論集』第1号、2008年3月、11-30頁、齋川貴嗣「国際文化交流における国家と知識人：国際連盟知的協力国際委員会の設立と新渡戸稲造」平野健一郎ほか編『国際文化関係史研究』（東京大学出版会、2013年）、431-453頁などがある。また、太平洋問題調査会に関しては、片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究：戦間期日本 IPR の活動を中心として』（慶應義塾大学出版会、2003年）、山岡道男『太平洋問題調査会「1925～1961」とその時代』（春風社、2010年）などがある。

4) 鶴見俊輔「日本の折衷主義——新渡戸稲造論——」『近代日本思想史講座Ⅲ』（筑摩書房、1960年）、183-222頁、北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」浅田喬二ほか編『岩波講座・近代日本と植民地（第4巻）統合と支配の論理』（岩波書店、1993年）、179-203頁、酒井哲哉「「帝国秩序」と「国際秩序」——植民政策学における媒介の論理」『近代日本の国際秩序論』（岩波書店、2007年）、138-232頁などがある。

国際秩序を捉える上でも参照された概念でもあった。このデモクラシー論を踏まえて考えることで、国際連盟に対する理想主義的な評価の裏に隠れた新渡戸の問題意識を明らかにすることができるのではないかと考えている。

## 1. 研究視角

新渡戸稲造のデモクラシー論は、これまで政治史の視点とキリスト教研究の視点の双方から研究されている。この節では、先行研究の概況について述べ、本論文の研究視角について明らかにしたい。

政治史の分野では、三谷太一郎が「大正デモクラシーとアメリカ」というテーマの下に、新渡戸のデモクラシー論を検討している。三谷は、1917年に東京帝国大学法科大学に設置された「米國憲法・歴史及び外交」講座（ヘボン講座）に注目し、この講座設置を契機に講義を行った美濃部達吉、吉野作造、新渡戸稲造の3人の知識人を取り上げている。この研究において、三谷は、美濃部や吉野とは異なり、新渡戸のデモクラシー論を「政治的なるものとしてよりもむしろ道徳的なるもの、倫理的なるものとして重視し、政治制度としての「デモクラシー」よりも生活様式としての「デモクラシー」が果たす機能に注目した」概念であると評した<sup>5)</sup>。続けて三谷は、国際社会に民主主義の概念を持ち込んだウィルソン主義を「政治的イデオロギー」ではなく、「宗教的道徳的基礎」をもった普遍的価値体系として、新渡戸が受け入れたことを踏まえ、新渡戸にとってアメリカ研究は「まさに大正デモクラシー運動の一環であったのであり、さらに普遍的個人道徳と神とを志向する宗教的道徳的価値追求の意味をもった」<sup>6)</sup>と指摘している。このように三谷は、新渡戸のデモクラシー論を宗教・道徳・政治という価値が密接な関係性をもった概念であったことを明らかにした。

一方、キリスト教研究の分野では、ジョージ・オーシロが新渡戸の生い立ちから検討しており、彼の大正デモクラシー期の自由主義者としての側面を強調

---

5) 三谷太一郎『大正デモクラシー論：吉野作造の時代とその後』（中央公論社、1965年）、旧版、139頁。

6) 三谷前掲書『大正デモクラシー論』、140頁。

して議論している。そして、「吉野や、美濃部や、大山郁夫などと違い、彼〔新渡戸〕のデモクラシー論は、自由と個人の権利を確保するための政治制度や憲法上の施策を強調するものではなかった」と指摘し、新渡戸の言葉を引用しながら「デモクラシーは単に政治的現象ではない、また法律やら制度を変へて、実現されるものとも思はれない〔……〕ただ「相互の人格を尊重する態度」である」と結論づけている<sup>7)</sup>。

三谷とオーシロは、アプローチは違うものの、それぞれ新渡戸のデモクラシー論を、政治制度という側面ではなく、社会道徳的側面が強いことを指摘し、その基礎にキリスト教人格主義<sup>8)</sup>の存在を指摘している点において共通している。

しかしながら、新渡戸と近代日本の対外関係を考える上では、新渡戸のデモクラシー論を社会道徳的な要素が強いという指摘だけでは不十分であるように考えられている。筆者は、これまでの研究を通して、新渡戸のデモクラシー論の基礎となっているキリスト教人格主義は、社会道徳にとどまる概念ではなく、国際関係においても参照される概念であったことを明らかにしてきた<sup>9)</sup>。実際に、新渡戸の評論などを読み進めるとわかるように、彼のキリスト教人格主義は社会道徳だけでなく、デモクラシー論、そして国際関係を捉える幅広い概念であることがわかる。例えば、新渡戸が定期的に寄稿していた『編集余録』には、以下のようにある。

諸国家を治める方は、道徳的には、個人の行為を治める法則と同じ性質のものでなければならぬ。現今では、利害と便宜が、政府相互間の交渉の指導動機である。しかし、正義、善、寛仁<sup>（みんじん）</sup>にこそ、外交の原則とされねばならぬ。個人間に良い交友関係を作り出すものが、国際関係の標準

7) ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造：国際主義の開拓者』（中央大学出版部、1992年）、155頁

8) ここでの人格主義は、厳密な神学的な理解ではなく、相互に人格を認めることで、他者の権利を認め、他者の自由を尊重する態度のことである。新渡戸の人格主義の理解については、新渡戸稲造「人格の意義」[1934年1月]『新渡戸稲造論集』、254-257頁参照のこと。

9) 拙稿「『ソシアリティー』と近代日本の国際協力：新渡戸稲造におけるキリスト教人格主義形成とその系譜」『青山国際政経論集』第100号、2018年5月、63-83頁。

にまで高められねばならぬ<sup>10)</sup>。

このように新渡戸のキリスト教人格主義が国際関係を捉える上でも参照された概念であったことに注目すれば、彼のデモクラシー論の基礎となったキリスト教人格主義に改めて光を当て、彼がどのように国際関係を捉えていたか明らかにすることができるだろう。したがって、本論文では、新渡戸のキリスト教人格主義の考え方を踏まえ、デモクラシー論を検討し、その上で新渡戸が国際連盟をどのように捉えていたか分析を試みたい。これが本研究の視角である。

## 2. 新渡戸のデモクラシー論

この節では、新渡戸のデモクラシー論の展開について述べ、彼の思想的背景にあったキリスト教人格主義がどのように結びついていたか検討したい。

### (1) デモクラシーの本家としてのアメリカ

これまでの研究でも指摘されているように、新渡戸がデモクラシー論を積極的に論じた時期は、アメリカ研究の高まりと同じ時期に当たる<sup>11)</sup>。上述した三谷の研究にもあるように、東京帝国大学にヘボン講座が設置されると、日本でも第一次世界大戦後の台頭が著しいアメリカ研究が本格的に開始された。このヘボン講座設置を記念した連続講義の中で、新渡戸はアメリカ建国史をテーマに講義を行った。その中で彼はアメリカ研究が急務であることを指摘し、その理由として以下のように述べている。

ただ種々な方面に於て、米国式の思想と制度とか世界を風靡しつつある事実を認むることを率直に断言するのである。[……]彼の英国の Stead

---

10) 新渡戸稲造「個人道徳と外交道徳」[1932年9月]「編集余録」『新渡戸稲造全集』第20巻、538頁。『新渡戸稲造全集』(教文館、1969-2001年)については、『新渡戸稲造全集』巻数を表示し、代わりに[初出年]を付した。

11) 斎藤真「草創期アメリカ研究の目的意識——新渡戸稲造と「米国研究」——」細谷千博・斎藤真編『ワシントン体制と日米関係』(東京大学出版会、1978年)、578-583頁。

氏<sup>12)</sup>が世界の米国化〔……〕という説を発表した時、彼の同国人は之を一つの滑稽論として見做して一笑に付したが、熟々其後の経過を鑑みると、彼の言は決して左程唐突でない事が分つた。新時代の相言葉として普く世界に唱道せらるゝ民主・民本説の如きは、その根元は、国々各々趣を異にするにしても、その運用に於ては米国を以つて好例とするではないか<sup>13)</sup>。

このように、新渡戸は第一次世界大戦後の国際社会におけるデモクラシーの広がり、アメリカの台頭と不可分であり、アメリカの思想の広がりと一体であると捉えていた。さらに、新渡戸は米国研究に先だつて、「大戦後に来るべき二大社会潮流」と題した小論においても、「今後益々顕著となるべき物質的發展」とともに「民衆勢力増進世界を風靡せん」という点を指摘しており、このデモクラシーの時代にあつては日本もその影響を受けることを免れないとしている<sup>14)</sup>。このように、新渡戸は第一次世界大戦後の世界を「民衆勢力」が台頭する世界として捉え、その上で「デモクラシーの名家」としてのアメリカ研究の必要性を主張していたのである。

新渡戸にとってのアメリカは、信仰的・思想的原点であり、札幌農学校においてアメリカ人教師たちから受けた影響やアメリカ留学での経験に結びつけられていた<sup>15)</sup>。開拓使によって設立された札幌農学校は、農業に関する専門分野を学ぶことを一義的な目的としながらも、「国家と社会に対するかれらの考えを高揚し、将来の地位にふさわしい教養を自主的にたかめさせる」<sup>16)</sup>とあるように、農学だけでなく、広く信仰を基礎とした人格主義教育が行われていた。こうした札幌農学校において、新渡戸はクラークが残したキリスト教的学風から

12) William Stead, *The Americanization of the World: the Trend of the Twentieth Century* (Horace Mankley, 1901) ではないか。

13) 新渡戸稲造『米国建国史要』[1919年]『新渡戸稲造全集』第3巻, 20-21頁。

14) 新渡戸稲造「大戦後に来るべき社会変化の二大傾向」[1917年]『新渡戸稲造全集』第4巻, 486-495頁。

15) この点については、前掲拙稿「『ソシアリチー』と近代日本の国際協力」を参照のこと。

16) 新渡戸稲造「札幌農学校」[1893年]『新渡戸稲造全集』第21巻, 367頁。

宗教的感化を受け、キリスト者となったことは広く知られている<sup>17)</sup>。そして、新渡戸は、1884年に経済成長著しいアメリカに渡り、革新主義知識人たちの社会変革について学問・社会的実践の両面を目にし、社会的な問題に対する視点を獲得していくのである<sup>18)</sup>。このようにキリスト教信仰と革新主義の影響を受けた新渡戸は『米国建国史要』において、アメリカ独立に至るまでの植民地建設とキリスト者指導者について取り上げ、アメリカ建国の流れをプロテスタント運動と結びつけて論じているように、新渡戸はアメリカ社会におけるキリスト教の意義を強く見出していた。こうした新渡戸のアメリカ観は、「デモクラシーは単に政治的現象ではない」として、「根本的な問題」として広く社会的な問題として捉えていくことにつながっていくのである。

それでは、具体的に新渡戸のデモクラシー論の内容を見ていきたい。新渡戸はデモクラシーの「根本的な問題」に、民衆が守るべき道徳としての「平民道」を求めている。新渡戸は日本の伝統的道徳規範である「武士道」を世界に紹介したことで知られているが、意外なことに新渡戸は「武士道」を「悲しむべしその十分の成熟を待たずして、今や武士道の日は暮れつつある」<sup>19)</sup>と表している。そして、特権的道徳であった「武士道」を、「民衆勢力増進」の時代に合わせて、「平民道」という普遍的な個人道徳へと読み替えていく。新渡戸が1919年5月に『実業之日本』に寄せた文章には次のようにある。

元来武士道は国民一般に普遍的の道徳ではなく、少数の士の守るべき道と知られた。しかし武士の制度が廃せられて士族というのはただ戸籍上の呼称に止まる今日には、かくの如き階級的道徳は踏襲すべくもない。これからはモ―層広い階級否階級的の区別なき一般民衆の守るべき道こそ国の道徳でなくてはなるまい。また国際連盟なんか力説される世の中

---

17) 札幌農学校時代の新渡戸については、松隈俊子『新渡戸稲造』(みすず書房、1969年)第3章に詳しい。

18) 新渡戸は留学したジョーンズホプキンス大学において、革新主義の影響を受けたハーバート・アダムズ(Herbert B. Adams)やリチャード・イーリー(Richard T. Ely)から教えを受け、またクエーカー派キリスト者たちの社会改革運動にも接していた。

19) 新渡戸稲造「武士道」[1900年]『新渡戸稲造全集』第1巻、137頁。

に、武に重きを置く道徳は通用が甚だ狭い。また仮に国際連盟が出来ないにしても武に重きを置かんとするよりは、平和を理想としかつ平和を常態とするが至当であろう。〔……〕武士を理想あるいは標準とする道徳もこれまた時世遅れであろう。それよりは民を根拠とし標準とし、これに重きを置いて政治も道徳も行う時代が今日まさに到来した、故に武に対して平和、士に対して民と、人の考えがモット広くかつ穏やかになりつつあることを察すれば、今後は武士道よりも平民道を主張するこそ時を得たものと思う<sup>20)</sup>。

このように新渡戸は国際連盟の設立を前にして、「武士道」のように「階級的道徳」ではなく、「一般民衆の守るべき道」として「平民道」という言葉を紹介し、また「武に重きを置く道徳」ではなく、人間に焦点を当て、「平和を理想」とする考え方の重要性を説いている。そして、デモクラシーの基礎について、続けて以下のように評価している。

僕は政治的民本主義が実施されるに先って道徳的といわんか社会的といわんか、とにかく政治の根本義たる所にデモクラシーが行われて始めて政治にその実が挙げられるものと思う。モット平たく言えば民本思想あって始めて民本政治が現われる。〔……〕米国がデモクラシーの国というのは共和政治なるが故ではない、彼らがまだ独立をしない即ち英国王の支配の下に植民地として社会を構成した時に社会階級や官尊民卑や男尊女卑の如き人格以外の差違を軽んじ、また職業によりて上下の区別をなしたり、家柄、教育を以て人の位附を定める如き事なく、人皆平等、随って相互に人格を認め、相互の説を尊重する習慣があったれば、今日米国のデモクラシーが淵源深く基礎が堅いと称するのである<sup>21)</sup>。

このように新渡戸は政治的デモクラシーが行われるためには、「根本義たる所」にデモクラシーが行われる必要があるとして、「人格の尊重」という道徳的な議論へと流れていくのである。

20) 新渡戸稲造「平民道」[1919年5月]『新渡戸稲造論集』, 217頁。

21) 新渡戸前掲論文「平民道」, 221頁。



## (2) キリスト教人格主義と普遍性

このように新渡戸が、デモクラシー論において「人格の尊重」を重要視していたことはどのような意味を持つだろうか。筆者はこの信仰に裏打ちされたデモクラシー論は、国際社会の普遍性を見出す契機となったと考えている。新渡戸はキリスト教の中でも、プロテスタントイズムの一派であるクエーカー派のキリスト者であった。このクエーカーは、人種や階級、性別の区別なく、万人に宿る「内なる光 (Inner Light)」を自らの拠り所とする信仰である。この普遍性を帯びる「内なる光」は地理的差違によって形成される人間の特殊性よりも、その差違を超えた普遍性という視点を開いていくのである<sup>22)</sup>。この普遍性が導き出される契機について、新渡戸が日米交換教授としてアメリカで行った講演をまとめた『日本国民』から考えてみたい。

社会慣行は、われわれの食べる食物と同じく、地理的境界とともに変異するであろうが、善悪はそんな境界に限られはしない。各国民の歴史的発展は、道徳観念の外に現れた姿には、さまざまな変容を加えてきたが、その本質において、道徳観念は世界中同一であり、永遠である。現在、これまでになかったくらい、人間活動の高次の領域はどこにあっても、全世界的標準が地域性や民族性にとって代わりつつある。風俗習慣にあっては、言語と芸術にあっては、また政治や社会形態にあっては、東は東、西は西であっても、道徳法則は羅針盤の指針によって区別はしない、東西いずれの半球にも等しく服従を求める<sup>23)</sup>。

このように東西の風俗習慣、政治や社会形態において違いがある中でも、道徳的観念は「世界中同一」であると把握されている。続けて、新渡戸は日本の道徳教育について触れた箇所では、以下のように言っている。

われわれの忠は、われわれの主人に対する関係で終わってはならぬ。わ

---

22) 道徳問題の普遍性については、森上優子『新渡戸稲造——人と思想』(桜美林大学北東アジア総合研究所, 2015年), 45-71頁に詳しい。

23) 新渡戸稲造『日本国民』[1912年]『新渡戸稲造全集』第17巻, 166頁。

われわれの誠実は、われわれの隣人との対応に限られてはならぬ。われわれの仁慈に地理的境界があってはならぬ。われわれは単に臣民たるに止まらない、市民でもある。しかも、単に日本の市民であるばかりでなく、世界共同体の市民である<sup>24)</sup>。

上で引用した新渡戸の言葉からわかるように、新渡戸は国際社会を一つの共同体として捉えていることがわかる。このように新渡戸の道徳的観念が国境を越えて適用されるという議論からは、新渡戸が国際社会に普遍性を見出していたと考えられる。

このように考えれば、新渡戸のデモクラシー論は、アメリカ社会における「人格の尊重」という点にあり、信仰に裏付けられた考え方であった。そして、信仰から導き出された道徳的観念の普遍性という新渡戸の考えを踏まえれば、新渡戸が国際社会を一つの社会として捉え、単に国内社会における社会現象としてではなく、国際社会全体に当てはまる現象として捉える契機ともなったと考えることができるのではないか。つまり、新渡戸にとってのデモクラシーは、国内の政治制度や政治的な自由という狭い観点からは捉えきれない、国際関係上の問題でもあったとすることができる。

### 3. 国際連盟に対する評価

次に、新渡戸のデモクラシー論を踏まえて、彼の国際連盟に対する評価について検討したい。国際社会に普遍性を見出していた新渡戸にとって、国際連盟はまさにその普遍性が具体化した制度そのものであったのではないだろうか。冒頭で述べたように、近年の国際連盟研究の進展によって、新渡戸が国際連盟において果たした役割が明らかにされてきた。こうした研究を踏まえつつ、第一次世界大戦後のデモクラシーの時代にあって、新渡戸は国際連盟をどのような存在として捉えていたかについて考えたい。

---

24) 新渡戸前掲論文『日本国民』、189頁。

## (1) 国際連盟と新渡戸

国際連盟は、第一次世界大戦の惨状を踏まえ、勢力均衡に代わる新たな国際秩序として集団安全保障体制の構築を目指して、設立された国際機関である。こうした新たな秩序を求める運動は、大戦中から民間主導ではじめられ、平和強制同盟会 (League of Enforce Peace, アメリカ) や国際連盟ソサイエティ (League of Nations Society, イギリス) がといった団体が組織されていた<sup>25)</sup>。こうした運動とともに、ウィルソン (Woodrow Wilson) は、1918年に第一次世界大戦後のあるべき国際秩序を「平和のための十四カ条」にまとめた。そして、講和会議において国際連盟の設立が提議され、設立に至ったことは広く知られている通りである。国際連盟が成立すると、日本は常任理事国として、総会や各種委員会、国際労働機関、常設国際司法裁判所などの活動に積極的に関わった。また、日本はアジア地域における国際保健事業において主要な役割を果たしたことが知られている<sup>26)</sup>。こうした活動は石井菊次郎や安達峰一郎などの外交官が担っていたが、新渡戸稲造も国際連盟事務次長としてこうした活動を支えていた<sup>27)</sup>。

新渡戸が連盟において果たした役割は、政治・外交の分野よりも、文化的な分野の方が大きい。新渡戸が任せられていた国際連盟の国際部門は、連盟規約第24条に規定されている他の国際機関との調整であった<sup>28)</sup>。他の国際機関との関係構築にあたって、新渡戸の役割は、民間主導によって設立された機関も含めて世界各地にある国際機関の情報収集、意見の聴取と調整、連盟への帰属についての検討という点にあった<sup>29)</sup>。この新渡戸の活動で具体的な成果へとつ

---

25) 篠原初枝『国際連盟』(中央公論新社, 2010年), 18-30頁。

26) 安田佳代「国際連盟と国際保健事業——日本外交における国際保健協力」細谷雄一編『グローバル・ガバナンスと日本』(中央公論新社, 2013年), 57-90頁。

27) 日本の国際連盟における取り組みについては、佐藤尚武編『日本外交史14: 国際連盟における日本』(鹿島研究所出版会, 1972年)を参照のこと。

28) 国際連盟規約第24条では、一般条約によって設立された既設の国際機関事務局は、当該条約当事国の承諾を得て、国際連盟の指揮下に位置づけられるとされている。

29) 齋川前掲論文「国際文化交流における国家と知識人: 国際連盟知的協力国際委員会の設立と新渡戸稲造」, 436頁。

ながつたものに、知的協力国際委員会 (International Committee on Intellectual Cooperation, ICIC) の設立がある。ICIC は国際連盟設立後に、ベルギーの国際団体連合 (Union des Associations Internationales, UAI) によって知的協力の制度の創設を連盟に働きかけたことによって設立された制度であるが、この時に、UAI と交渉にあたったのが新渡戸であった。新渡戸を中心に ICIC の委員の人選が進められ<sup>30)</sup>、1922 年 5 月に ICIC が正式に設立された。新渡戸は、世界各国の 12 名の学者とともに会議の運営に当り、同年 5 月には第 1 回会合が開催され、3 つの分科会 (①著作権、②著作目録、③大学) の設置が決議された。そして、新渡戸の在任期間中に、1924 年にはフランス政府が委員会付属の学芸協力所をパリに設置するなど、ICIC は活動の幅を広げていった。

## (2) 国際連盟における社会的・経済的協力

このように国際連盟において、知的協力の分野を中心にして活躍した新渡戸が国際連盟をどのように捉えていたか見てみたい。1925 年に出版された「国際連盟の組織と活動」には以下のようにある。

[連盟の目的を第一に戦争を止めること、戦いを防止することを挙げて、第二に] 次に戦争をするにはいろいろな理由原因があり得る。之を除去せねばならぬ。[……] 多くの場合、乍然今日の所ではまあ経済上の利益関係から戦争が起こると云ふことが通常である。そこで此の戦争を未発に防ぐには、聯盟加盟国は是非経済上のことに付いても協力をしようといふ事にした。其の外の事についても、よし規約には規定なくとも、教育だとか或いは学問だとか云ふことに付いても協力しよう、聯盟はまた道徳問題、例えば婦女子の売買の禁止、或は阿片の禁止等を云ふことに

---

30) D・バナージ (カルカッタ大学教授), H・ベルグソン (コレージュ・ド・フランス名誉教授), K・ボンビー (クリスチانيا大学教授), A・デカストロ (リオデジャネイロ大学医学部長), キュリー夫人 (パリ大学), J・デストリー (元・フランス科学・芸術大臣), A・アインシュタイン (ベルリン大学教授), G・ハレ (シカゴ大学教授), G・マーレイ (オックスフォード大学教授), G・ド・レイノルズ (ベルン大学教授), F・ラッフィニ (トリノ大学教授), L・デ・トレス・ケヴェド (スペイン電機機械研究所) などの 12 名を中心に運営された。

各国の協力を確実にせしめようと、総べてさう云ふ方面の活動を趣旨として居る。感情が混つて居る仕事だけれども、斯く云ふ社会問題的のことに付いても各国相談し合つて、規約の条文に書いてないことでも、各国のコオペレーションを以つて、戦争を未発に防がう、即ち戦争を止めると云ふのが聯盟の最大の目的である。尚もそれ紛争調停することに依り、戦争のない様にしようとする、是が聯盟の最大の目的である<sup>31)</sup>。

新渡戸は、国際連盟の一義的な目的は勢力均衡に変わる集団安全保障体制の設立であることについて述べた上で、戦争の原因となる経済的、社会的な問題についても協力する必要性について述べている。実際に、国際連盟規約にない問題についても協力する可能性について言及している点は、まさに国際連盟規約に設立根拠を持たなかつた ICIC の活動に取り組んでいた新渡戸らしい発言である。そして、国際連盟規約に規定があるなしに関わらず、広く教育や道徳、婦女子の売買、阿片などの社会問題の協力を通して、戦争を防ぐことが国際連盟の最大の目的であるとしている。

新渡戸の経済的、社会的な問題についての協力を重視した国際連盟に対する理解は、1931年に公開された「国際連盟の活動の拡大」という小論においても議論されている。

国際連盟の影響力は、時間的にも空間的にも拡大しつつある。それが注意を集めている活動は、今や、政治的性質のものというより、むしろ社会的、経済的、道徳的なものであり、そのことは、連盟が平和時においても、世界に永遠に必要な制度であることを物語っている。連盟の最初の六年は、主としてヨーロッパ大戦の残骸の除去に忙殺されていた。硝煙の臭のする仕事も、まだすっかり片付いたわけではない。しかし連盟の注意はますます、国際協調という、より平和な仕事に向かっている。そして、その組織化が進歩して、この段階にまで達すれば、連盟の機能

---

31) 新渡戸稲造「国際聯盟の組織と活動」[1925年]『新渡戸稲造全集』第4巻、407-408頁。正確には、「婦人及び児童の売買」や「阿片其の他の有害薬物の取引」については、国際連盟規約第23条に規定がある。

はどうあってもヨーロッパよりさらに広い空間に及ぶにちがいない<sup>32)</sup>。

新渡戸は、このように国際連盟の活動を「政治的性質」よりも「社会的、経済的、道徳的」なものであるとして、国際連盟の役割を「硝煙の臭いのする仕事」から「平和な仕事」へと向かっていると表現し、さらにヨーロッパだけでなく広く空間的には広がっていくことを予見している。つまり、新渡戸は国際連盟によって、国際協調が組織化され、やがてヨーロッパだけでなく世界へと拡大していくことに対して確信を有していたと考えられる。

### (3) 国際連盟と「国際家族」

新渡戸は1926年に国際連盟事務次長を辞して、翌年日本に帰国するが、その後の日本で待っていた事件は、満州事変をきっかけとした国際連盟脱退であった。脱退後の新渡戸の評論には以下のようにある。

われわれが連盟を去ろうとも、“国際家族”を去ることはできない。われわれを連盟に結ぶ絆は法的で、契約的なものである。われわれを“国際家族”と結ぶものは、経済的かつ道徳的である<sup>33)</sup>。

新渡戸は「国際家族」という言葉を用いて、国際連盟を脱退しても経済的かつ道徳的な絆を切ることはできないとしている。また、「国際聯盟とは〔……〕数多の国がその代表者を出して共通的に利害関係あることを討議し、国際正義の確立、世界平和の助成、人類協力の増進という三大使命を行わんとするものである。これを国家の機関に譬えれば議会の如く万国のための議会のようなものである<sup>34)</sup>」と表現していることから、国際民主主義の進展において国際連盟に大きな役割を見出していたと考えられるのではないだろうか。

32) 新渡戸稲造「連盟活動の拡大」[1931年2月]『新渡戸稲造全集』第20巻、229頁。

33) 新渡戸稲造「国際民主主義」[1933年4月]『新渡戸稲造全集』第20巻、605頁。

34) 新渡戸稲造「国際聯盟とは如何なものか」[1925年]『新渡戸稲造論集』、268頁。

こうした新渡戸の発言は、晩年に新渡戸が取り組んでいた太平洋問題調査会においても見出すことができる。太平洋問題京都会議における新渡戸の開会の辞には、以下のようにある。

〔トーマス・ヒル・グリーン (Thomas H. Green) の「如何なる個人も自らの良心を造る能わず、これを造るには常に一つの社会を必要とす」という言葉を引用し〕もしこれが真実(私は真実と信ずるのですが、)であるとするならば、国家が今まで永い間不道徳であったという理由は、国家の絶対独立絶対主権といったような誇張的な考えに捉われて国家が聯合の可能性を認めないとしたことに依るといえることは出来ないでしょうか。国際連盟が少なくとも私の考えでは吾ら人類の将来にとって欠くべからざるものであるというのは世界が結合している。この点、即ち相共通した普遍的な正義の観念を現わし、これを培って行くという点にあると思うのであります。〔……太平洋問題京都会議開催において〕必然それに伴うべき成功条件というべき精神的態度は国際精神であります。これは一国の利己心から離れてあらゆる国際問題を公平に客観的に科学的に観んとする精神であります。国際的精神といってもこれは国家精神に相対立する対義語ではなく、それかといって国家的基礎を欠いている宇宙精神と同義ではありません。国際精神とは国家精神の延長ともいえるべきものであつても博愛慈善が過程に始まるという如きものであります<sup>35)</sup>。

この開会の辞には、新渡戸の国際社会の捉え方が非常によく反映されている。新渡戸は国家同士の連合を困難にしている原因を、「国家の絶対独立絶対主権」という捉え方ではないかと指摘し、「世界の結合」のためには国際連盟が重要であるとしている。また、新渡戸は会議の成功の条件として、「国際的精神」という言葉を用いて、一国の利己的な考えから離れ、公平に客観的に、科学的に見る必要があることを主張している。そして、国際社会における権力関係を重視する視点から批判されることを念頭に、「国家的基礎を欠いている宇宙精神」とは異なることを強調しているのである。

35) 新渡戸稲造「太平洋問題京都会議 開会の辞」[1929年]『新渡戸稲造論集』, 306-311頁。

新渡戸の国際連盟における活躍は、安全保障問題よりも、社会・経済・文化といった領域の問題に集中している。これに対しては外交官としての経験を持たなかった新渡戸が十分に活躍できなかったと批判することももちろん可能であろう。しかし、新渡戸が国際連盟の設立を、国際協調が組織化され、さらにヨーロッパを越えて拡大していくことへの契機として捉えている点は重要である。そして、国家の絶対主権という枠組みを超えて、国際連盟において「普遍的な正義の観念」を見出ししていくのである。このように考えると、新渡戸が「国際的精神」を涵養することの重要性を説き、国際社会における「道德問題」を扱ったことは、国際社会を「社会」たらしめんとする新渡戸の隠れた信念があったと評価することができるのではないだろうか。

### おわりに

ここまで、新渡戸のデモクラシー論と国際連盟に対する評価に焦点を当て、彼の国際秩序認識について検討を行ってきた。新渡戸のデモクラシー論は政治制度に関する議論とは異なり、道徳的な問題に議論が流れていくことから、これまでの研究では社会道徳的な側面ばかりに注目されてきた。しかし、本論文のように、新渡戸のデモクラシーの原点であるキリスト教信仰の問題を含めて検討することで、新渡戸がデモクラシーの道徳的側面を強調した背景には、国境を越えた国際社会の普遍性があったことが明らかとなった。そして、その普遍性を体現する機関が国際連盟であった。新渡戸は国際連盟を「万国の議會」の場としても捉えており、安全保障上の問題よりも社会的、経済的な協力を、国際協調の組織化として重視していた。このように考えれば、新渡戸は国際連盟を国際民主主義を体現する場として捉えていたと言うことができる。

こうした新渡戸の国際秩序認識はあくまでも認識であり、日本の対外政策や国際連盟の取組に画期的な影響を与えたと評価することは難しい。しかし、「国際社会」は主権国家のみで構成されているという「幻想」を離れれば、地球上に存在する人々や国際団体、主権国家などさまざまなアクターが密度の差こそあれ、つながっていることを早くから認識し、国際関係に「社会性」を見出し



## キリスト者知識人にとっての国際連盟

た新渡戸の視点は重要ではないか。実際に、このような国際社会を多元的に捉えていた新渡戸の下からは、数多くの国際協力の担い手が輩出されたのである。

冒頭で引用した新渡戸の言葉は、確かに理想主義的な表現であり、信仰にも近い言葉である。しかし、こうした信仰によって裏付けられた確固たる確信を持った人物たちの国際秩序観が、物質的な権力関係とともに、第一次世界大戦後の国際関係を形作っていたと考えることができるのではないか。

❖山影進先生のご退任にあたって

山影ゼミの「芸風」と「お作法」

山影進先生がご退任されるにあたって、山影ゼミの「芸風」と「お作法」を振り返り、心からの感謝の言葉をお伝えしたい。

筆者は、山影先生が青山学院大学に在籍された2012年から2018年の6年間、指導を受ける幸運に恵まれた。山影先生の授業は、海外の学説を学ぶことよりも、多様なアクターが織り成す多層的な国際関係を「どのように分析するか」という点が重視されていたように思う。山影先生の扱う題材の幅広さと奥深さを通して、気がつけば、筆者は「国際社会」という不思議さ、面白さにすっかりと引き込まれてしまった。

そんな山影先生のゼミは、表向きはマルチエージェント・シミュレーション(MAS)を通して、さまざまな社会現象を分析することを目的としていたゼミであったが、実際には、初めからMASに関心があったというよりも、行き場を失った学生たちの集まりであった。筆者もその一員であり、ユニークな友人たちとともにMASの技法を学んでいた。

大学院へ進学し、いざ研究テーマを決める際に、MASを用いた研究と日本外交史の研究などいくつかの候補を持って先生にご相談に伺ったことがあった。その時、先生からいただいたコメントは「君が一番面白いと思っているテーマはどれですか」というシンプルなものであった。そして、何を思ったか、筆者はMASに関するテーマではなく、日本外交史の分野のテーマを選んだ。MASから離れてしまったことにかばっかりか後ろめたさを感じながら研究を続けていたが、先生はそれほど気にされていない様子であった。「星を見る時は望遠鏡、細胞を観察する時は顕微鏡」と事あるごとに力説され、MASの技法にとらわれず、研究対象にふさわしい「メガネ」で何を見るかという点が大切であることを何度もご指導いただいた。今、考えれば、学生それぞれの問題関心を尊重しようとする先生の優しさであり、学生たちがそれぞれ「メガネ」を持っ

て、思うがままに研究することが、山影ゼミの「芸風」であったのではないかと思う。筆者はずいぶんその優しさに励まされた。

そんな優しさの裏では、研究における「お作法」もみっちりご指導いただいた。筆者が専門とした「キリスト者知識人と近代日本の国際関係」は、理論やアイデアをこねくりまわす議論に陥りやすい思想史研究であった。先生は議論が曖昧な時、アイデアでアイデアを説明しようとする時には、「一に実証、二に実証、三、四がなくて、五に実証」と厳しくご指摘くださり、アイデアが実際に社会にどのような影響を与えたか客観的に議論するように厳しく指導下さった。

6年間、山影先生からはさまざまなものを学んだが、一番の財産は「芸風」と「お作法」ではないかと思う。この財産を胸に、まだまだ若輩者である筆者であるが、いつの日か先生から頂いたご恩に報いることができるように精進していきたい。